

第13回吉備路再発見講演会

日時：平成23年11月26日（土） 13：30～15：30

会場：備中国分寺客殿

講師：愛媛大学ミュージアム 吉田広 准教授

演題：「吉備の青銅器文化」

御紹介いただきました愛媛から来ました吉田です。清水会頭からも愛媛と岡山の関係のお話がありましたが、松山市の北側に和気郡という地名が残っています。また、馬評（大宝律令の施行により郡に改称）と書いた須恵器を岡山県立博物館が所蔵しているのですが、私は宇摩郡の川之江高校卒業で縁深いところになります。さらに愛媛では、鬼ノ城が作られた時代、「熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな」の額田王の句が有名で、熟田津の所在地をめぐる論争が続いています。斉明（天皇）一行が白村江まで百済救援に出て行くとき、愛媛から福岡に出て行くという港で読んだ歌ですけれども、実は松山に来る前は岡山の牛窓から旅立っています。朝鮮半島まで救援に行くとき、兵站にするだけの大きな力を持っていたのが、吉備・伊予ということです。

久しぶりに吉備路風土記の丘に来させていただきましたが、五重塔をこんなに近くで見るとは初めてです、いいところですね。学生時代、25年ほど前ですが、当時は整備された遺跡はまだまだ少ない中、ここは風土記の丘構想で非常に早くから整備されていて、吉備津から総社まで自転車で夏の暑い中を1日仲間と見て回ることができました。造山や作山は今より木がうっそうとしていて、楯築もだいぶ雰囲気は違っていたのでしょうか。田園風景の残るこの地で新県立博物館ができ起点となれば、歴史を知るいい環境になると思います。予算や財政も厳しいと思いますが、外から応援させていただき、今日お集まりいただいている方が中心となって、そういう施設をこの地に作っていただければ、外から来られる方にとって非常にありがたいと思います。

今日お話しします弥生時代の青銅器は、吉備が力を持つ前史、吉備が独自の輝きを持つ前の時代になります。吉備らしい遺跡といえば、総社では作山古墳が一番大きな遺跡になるのでしょうか、最近鬼ノ城でしょうか。考古学をやっていると、造山古墳は河内に張り合うような豪族が吉備にいた、その時代が吉備の一番輝いた時代だと思います。もう少し遡れば楯築弥生墳丘墓、私は弥生時代を専門としていて、この楯築弥生墳丘墓は当時としては非常に大きな権力を持った人が葬られたと考えなければなりません。金印を西暦57年に後漢からもらってきますが、その後倭国王帥升が107年にもう一度朝貢しています。その107年ごろ一番大きなお墓がどこかという、岡山大学の松木先生は最近の年代観によって、楯築こそが倭国王帥升の墓ではとおっしゃっています。そのような可能性もある楯築の時代も、吉備が最も吉備らしく輝いていた時代だと思います。では、吉備が吉備らしく輝くよりも前はどのようなものだったのか、これからお話していきましょう。

まず、岡山の弥生時代はどうだったのでしょうか。桃太郎スタジアムには弥生時代前期

の大きな遺跡があって、水田が出ています。津島遺跡です。百間川遺跡では稲株の跡も出ていて、水田を作り始めたことがはっきりしています。縄文時代の狩猟採集から水田稲作を始め、富の集積が進んで社会階層が生まれ国家ができていく時代です。ただ最近、考古学者は、本当に米作りを始めて正解だったのか、狩猟社会のままでもよかったんじゃないかと考えたりもしています。少し横道にそれましたが、日本が米作りに特化して米で生きていくと決めた時代、それが弥生時代というわけです。今から **3000** 年くらい前に米作りが九州で始まっただろうと言われ、岡山で最も早く始まったのが津島遺跡です。その後人口が増え、大きな集落ができてきます。山陽団地の用木山遺跡では、高級住宅街のように山を削りながら集落ができています。また、初めて金属を使い出したのも弥生時代ですが、鉄と青銅がほぼ同時に伝わってきました。こういった弥生時代で、吉備の特産品といえる一番古いのが分銅形土製品です。顔が描いてあったりして、縄文時代の土偶のようなもので、何に使ったのかは定かではありませんが、吉備に特徴的なまじないの道具、お守りの的に用いたのでしょう。それが最初に吉備らしさを主張したものでした。そして、吉備の弥生時代の代表的な遺跡が楯築弥生墳丘墓。30 kgを越すような朱（水銀を精製したもの）がたくさん納められた王の眠る棺が見つかっています。なぜこのような当時日本一の墓が楯築が造られたのか。それを前史の青銅器から解き明かしていきたいと思います。

青銅とはそもそも何かというと、銅と錫（すず）、およそ8割と2割の合金。弥生時代には銅と錫だけでなく鉛が含まれることもあります。それらを溶かして鑄型に流し込んで作ります。鑄造ですね。鑄型から取り出して磨いて刃物にしたりします。本来は緑青のような錆びた色ではないんですね。銅と錫の成分比率を変えることによって色が変わり、時代や種類によって割合が変わったりします。

武器形の青銅器には、銅剣・銅矛・銅戈があります。剣は真ん中に分厚いところがあって、とび出た部分を木の柄につけて使う道具。矛も真ん中が分厚いですが下半は中空で、そのソケット部に柄を入れて、槍のように使う。矛盾の「矛」です。戈は今あまり使われていない道具ですが、柄の先に **90** 度近くにつけて、中国の騎馬戦で馬車に乗った兵士が歩兵の首を狙って打ち落としたものです。中国では戈が重要な武器で、漢字の中にこの文字が残っている。「戦」の字のつくりですね。他にも「干戈を交える」と言ったり、中国では戦争を語る上で、武器の代名詞として機能しています。日本では、馬が入ってくるのが造山の時代だったので、戈は弥生時代に入ってきたものの廃れたわけです。この3種類が弥生時代の武器形青銅器ですが、いずれも時代の変遷とともに大きなものに変化しています。見た目は強そうにですが、大きくなればなるほど厚みをしっかりしなければならぬのに、逆にべらべらの薄いものになっています。また、武器は柄にしっかり付くことが大事ですが、柄に付く部分も次第に小さくなっています。銅矛は大きくなり槍先が **80** cmにもなって振り回せるようなものではありません。ソケットももう開かなくなっています。つまり最初は柄に付けて武器に使えたのが、後には使えなくなる。では何に使ったのか、武器の形をしたそれ自体が御神体とかお祭りの対象になるような道具だったんじゃないかと思えます。ですから私たちは武器形祭器という言い方をするわけです。

弥生時代の青銅器にはもう一つ、銅鐸があります。吉備でもかなり出ています。鐸と言う字は今ではあまり使いません。「社会の木鐸」という漢字の書き取りなんかで出てきたりする程度です。元々はベルで、中空になっていて中に心棒をぶら下げて鳴らす、イメージは牛のカウベルです。吊り下げて音を鳴らす道具として中国で登場しました。弥生時代の人も金属の音の響きに聞き入っていた。国分寺の梵鐘の音、余韻を浸す音がこの風景の一つになって、感慨深く私たちは聞きますが、弥生時代は初めて聞くカーンという乾いた金属音に、当時の人も特別な意味を感じたことでしょう。つまり銅鐸は楽器として入ってきたものでした。では日本に入ってどういう変化をしたかということ、楽器として吊りさげる部分に注目してみると、その変化がよくわかります。最初は吊り手部分がしっかりした断面菱形をしていました。それが徐々にまわりに余分なものがついて、最後は全体が大きく飾られるようになる。でも菱形部分は残っています。元々あったものがこういうように痕跡的に残っているものを痕跡器官と言って、モノの変化を知る上で重要なポイントです。元々生物の進化論から、人が作り出したモノにも応用したものです。例えば、スーツも今ではフォーマルですが、元々は作業もできるもので、その名残で袖口をまくり上げるためボタンが着いていますが、今では開くことのない、飾りとしてのボタンです。こういったところがモノの変化を考えるヒントになり、物事の本質が見えてくるわけです。銅鐸の変化はそういうものがよく見えている。元々しっかり吊るせたものが吊るせなくなる。次第に大型化し、最大1 m30 cmを超えるものがある。今でこそ非常に大きな梵鐘を吊り下げていますが、弥生時代は無理でしょう。つまり大型のものは鳴らしたのでなく、置いて見ていた。田中琢（たなかみがく）先生は、「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」へと変化した、とうまく表現したところです。

つまり弥生時代の青銅器は、武器形青銅器なら最初は武器として使える、銅鐸は音が鳴らせた。それが見た目だけを崇めるものになっていった。弥生時代にはそういったものとして青銅器を一所懸命作っていた。金属の貴重な時代、現代の私たちから考えると使えないものに投資をしていたわけです。でも弥生時代の人にとっては合理的で、現代の感覚と違っていたのです。縄文土器は非常にきれいな芸術的なものですが、時間をかけて丁寧に作っています。土器一つに大きな労力を費やすのが合理的だった。しかし、時代とともにシンプルな文様になり、土器を作っていた時間を別の労働に使っていくようになるわけです。銅鐸を専門とする先輩が、「銅鐸も今から見ると無駄なものだけど、今の時代の核兵器だってそんなもんだろ」と言われ私ははっとしました。使えなくても持っていることに意味があるんですね。

さて、ではそのマツリに使った場面はどういったものだったのでしょうか。大阪にある弥生文化博物館で弥生時代のマツリの様子を復元的に紹介しています。鳥の格好をした人が盛り上げ、銅鐸が吊り下げられ音を響かせている光景が示されています。また、青銅器は埋められた形で出てきてくるものが多くあります。島根県の荒神谷遺跡では非常にたくさん銅剣が出土しました。埋める・奉げるという行為もマツリの一つの形であったと考えられます。現代の祭りはどうでしょうか。愛媛では新居浜の太鼓台が有名で、非常に賑

やかです。競い合い・意地の張り合いで喧嘩になることもあります。私の川之江も同じですが、やはりお祭りは自分のところが一番。まわりから新居浜と同じに見られるのが嫌で、細かいですが、自分のところと新居浜の違いにはうるさい。何が言いたいかというと、お祭りは自分のところが大事で、よそと競いあう。弥生時代も同じだったと思います。実は地域ごとに使う青銅器が違うようになるんです。中広形の銅矛は対馬から九州そして高知に広がりました。近畿や四国の東側は扁平鈕式の銅鐸を使っていた。出雲はまた違う青銅器、愛媛・香川も違う。吉備は銅鐸のエリアに入っているが決して多くはない。山口・広島はぽっかり空いている。地域ごとに違う青銅器で、「自分のところはこれだ」ということを始める。今の祭りと同じように意地の張り合いをしていたのが当時の青銅器のあり方だったと思います。

では実際に吉備でどのような青銅器があるのか、見ていきましょう。吉備に最初に出てくるのは銅劍。高松田中遺跡の銅劍の先端部分です。非常に小さくて指先くらいのものでノミに転用しています。**2300～2400**年前に初めてもたらされたもの。それが完品になるのが、児島の飽浦山本ノ辻の銅劍。弥生時代中期のもので、現在東京国立博物館に入っています。その後武器形青銅器は平形同劍があります、これが銅劍では最後になります。

一方、銅鐸は多く出ています。銅鐸も一番古いのはないですが、その次の段階の銅鐸が美作津山の念仏塚。同じ鋳型で作られたのが出雲にあります。その次が種松山の銅鐸。身を四区画にしている銅鐸で、お坊さんの袈裟に似ていて袈裟襷文と言っています。吉備ではこの小さい四区の袈裟襷文がたくさん見つかっています。安仁神社・雄町の銅鐸ですね。雄町の銅鐸は、こいのぼりの支柱を掘っていて見つけたもので、現在岡山県博に保管されています。次は井原の下稲木、明見、猿ノ森と井原のもので六区画の袈裟襷文です。兼基の銅鐸も同じですね。そして最新が、岡山市の草ヶ部、旧真備町の妹銅鐸、そして足守川上流の高塚です。妹と高塚は水の流れのように見える文様をもっていて流水文銅鐸と言います。大きさは**60 cm**くらい。

こういった青銅器が吉備にはあるのですが、中でも特徴的なものの詳細をもう少し見てみましょう。まずは足守で出た銅鐸です。同じ種類の銅鐸が島根の木次町木幡家旧蔵銅鐸で、最近九州の吉野ヶ里遺跡で初めて銅鐸が出土して、木幡家旧蔵銅鐸と同じ鋳型で作られたことがわかりました。銅鐸というと近畿と思われていますが、実は九州でも銅鐸の鋳型が出ていて、九州産の銅鐸があるんです。足守の銅鐸もその仲間で、九州で作られて吉備にもたらされたものです。他に、伝伯耆と東広島の福田にあり、中国地方に九州産の銅鐸が4つある。同じように九州産の青銅器が、干拓作業の途中で出てきた笠岡湾の海上がりの銅戈。広島の御調八幡宮にも同じような銅戈があります。これら銅鐸や銅戈は、中国地方向けの注文生産か中国地方の趣向を考えて九州が作ったもの、九州では自らは使わないものを作って中国地方に輸出しているのです。一方、東からも特徴的な銅鐸がもたらされています。猿ノ森の銅鐸です。紋様が鮮明で、銅鐸の中でも最も美しいと言われる横帯分割型の銅鐸です。おそらく当時は非常にきれいに光り輝いていたことでしょう。近畿より兵庫・岡山と西寄りでも多く出土しています。もう少し新しい時期でも、迷路派流水文銅

鐸が特徴的で、一本一本の線が迷路のように複雑に入り組んでいます。これも近畿より西側で出ています。そして、北四国からの由加山平形銅剣も非常に美しい紋様「S字状連続渦文」が描かれています。おそらく土の鋳型に細かい文様を刻んだもので、四国にもない美しい銅剣です。このように、吉備には九州から銅戈や銅鐸が九州で使うものとは違うものがもたらされている、でも吉備の中心部までは入ってきていない。平形銅剣も北四国から特注のようなものが児島にもたらされているものの、吉備の中心には到っていない。近畿の銅鐸も、特注品というか、吉備のご機嫌伺いをしているような特段なものが入ってきている。でも吉備の中心地部分は青銅器空白という部分はどうしてもある。そういうふうに見えるのが、吉備の青銅器文化です。

では、吉備でどのように青銅器文化を受け容れたのか、その実際の様子を少し探ってみます。まず銅剣に下のところに孔が開いています。九州ではこういう孔は開けません。新しくなるにつれて孔の位置が高くなり、柄につけるための孔ではなさそうです。銅戈と銅矛は柄に飾りをつけますから、銅剣にも飾り用に開けた孔ではないでしょうか。九州からもたらされた銅剣に孔を開けて飾りをつける、飾りを付けるので柄は銅矛と同じように長く、高く掲げて見せるような使い方を、吉備はじめ瀬戸内ではしていたようです。元の九州とは違う使い方です。さらに青銅器を石や土で真似ることを始める。吉備では、横に銅剣を置いて作ったとしか思えないほど精巧な木製品を作っています。他のところでは、見た目の外形だけだったり、近畿では石を使う。武器をマツリの道具として使うことが吉備では早くから始め、また青銅器の真似方にも地域性が現れていることが分かります。ところが、平形銅剣の時期には武器形のマツリは吉備で廃れていきます。

代わって銅鐸が近畿からもたらされ、吉備では銅鐸をメインに採用していたようです。井原の明見銅鐸（井原市の埋文センター）は埋められた当時の様子が分かる状態で発見されています。また下稲木・猿ノ森と特定の地域に集中し、比較的に見晴らしのいい場所に埋められています。また銅鐸でも、10 cm程度の粘土製で銅鐸を写し取ったものがあり、袈裟襷文や鋸歯文が真似られています。銅鐸と同じく、古い段階は県北にあって、近畿から中国道を通ってきた、山陽道を通っていないというイメージが、土製品でもあります。その後、多くの土製品がありますが、それぞれ形が違い、横の鱗とか袈裟襷文と意識するところも違っているようです。銅鐸のマツリの参加者が、銅鐸を遠くから見てそれぞれ作ったような様子を推測することができます。ですから、吉備では武器形青銅器よりも銅鐸の方がある程度民衆の中に浸透していたことが窺えます。実際に、少し離れてはいますが、百間川の遺跡では兼基の谷で3つ銅鐸が見つかり、原尾島の集落で土製品が出ています。

青銅器の受容を順番に整理すると、まず北にはずれて近畿から銅鐸が入ってくる。九州からは銅剣。土製と木製でそれぞれ模倣しますが、まだあまり真ん中には入ってきません。中期中頃になると銅剣もありますが、銅鐸がかなり吉備の中核に入ってきます。次の段階では九州のものとは縁が切れてきて、銅鐸だけが東から入ってくる。ただ周縁部には特注品が入るようになる。最後には、中枢部にかろうじて銅鐸が入っている程度で青銅器文化は非常に希薄あるいは空白になる。

ではこの空白は何か。なぜ吉備は青銅器をあまり受け入れなかったのか。一つは地理的要因もあるのでしょう。吉備が近畿九州との中間にあること。弥生時代は中国大陸が高い文化を誇っていて山陰側が表になり、九州や出雲が窓口だった。それに対して吉備は、周りから青銅器が来るものの、それをかたくなに拒否できるような地勢にあった。そこに吉備の高い生産力も大きな要因かと思います。

高塚の銅鐸が吉備では最後ですが、西日本的に見ても後期の早い段階で埋められていたと考えられます。あとは小型の銅鐸がわずかに残る程度で、西暦 50 年を過ぎるともう青銅の祭器がなくなってくる。分布図で空白になり、青銅祭器がない地域が生まれたわけです。そこに代わって登場してくるのが、青銅の鏃です。吉備では足守川流域の後期の遺跡を掘ると必ずといっていいほど出てきます。百間川遺跡群でも同じです。今までマツリの道具として使っていた青銅が、鏃として武器用の消費財に当てられるようになったわけです。このような変化は吉備だけでなく各地で見られるようになります。

そういうときに登場したのが楯築の弥生墳丘墓です。後期後半の最初くらいの時期。ここには首長のお墓に 30 kg を超すような水銀朱、当時の不老不死の仙薬が納められるなど、葬られた一人に対して多大な労力が使われています。葬られた棺桶の上には白色円礫堆があり、砂利を盛り上げた中にお墓のお祭りの道具が一緒に出てきました。土製の勾玉とか人形の土製品。さらに重要だったのが特殊器台、マツリの後の飲み食いを象徴するような器です。青銅器のように、銅鐸・銅剣を見せて神様に奉げるようなマツリから、全く違うお墓に労力を投下するマツリになる。お墓に貴重なものを惜しみなく入れ、葬儀が終わった後は飲食を伴う盛大な葬送儀礼が行われる。こういったことがこの楯築で始まったとされています。今までなかった新しい儀礼。お墓を中心とした儀礼が作られている。その主がひょっとしたら倭国王帥升だったのかもしれない。

なぜ楯築の主はこういうことができたのか。それまでのマツリ、青銅器祭祀では常に周りから青銅器がもたらされ、かつそういった地域から距離を置いていた。また、特注品が用意されるような地域として吉備が意識されていた。四国は中期に自分のところで平形銅剣を作っていた。出雲もおそらくそうです。ところが吉備は自分のところで作らなかった。どういう判断が働いたのか分からない。必然だったのかどうか、むしろ偶然の要素もあるのではないか。それでもとにかく、吉備は自ら青銅器のマツリをすることを選ばなかった。それが大きい。だからこそ次の段階、青銅器とは異なるお墓を大きく作ってそこで盛大な葬儀をやる、そういうシステムを作り、そこに村の共同体のマツリのメインを持つていくことができたのではないか。自らの青銅器を選択しなかったことでこういう飛躍ができた、青銅器が稀薄だっただけに次の飛躍を用意できた、それがこの楯築の姿ではなかったと、青銅器文化から見て思えるわけです。

弥生時代後期に近畿や九州は青銅器をまだ使い、四国や出雲ではなくなっていく。そういうときに吉備では青銅器祭祀とは違う墳墓祭祀ができて、それが核になって吉備の地域社会ができてきた。青銅器がなかった故にできた。それが大きな特徴で、吉備が吉備たる所以。楯築という形で一つのピークを迎えることになり、次の段階には、吉備の墳墓祭祀

の要素をたくさん取り入れ、さらに山陰や九州などから色々な要素を取り入れて、前方後円墳の祭祀が創出されます。その際に大きな役割を果たしたのが吉備であることは間違いありません。この後、今度は前方後円墳が全国に広がっていき、その中でも吉備は何度か畿内と張り合おうとします。それがまさに造山古墳や作山古墳であり、日本書紀の吉備の反乱伝承であります。そういう吉備らしさは、弥生時代に創出された墳墓祭祀が、古墳時代以後も継承されたからに他ならないでしょう。そして、その吉備らしさは、墳墓祭祀という新しい祭祀を作る際の、青銅器文化の空白が重要な前提であった。それが吉備の始源ではないかと思います。

こんな吉備の一側面も、博物館施設で語る場があればと思いますので、この会の活動もぜひ続けていってください。